

【第7回】

「重症心身障害のある人とのコミュニケーション」

私は、デイセンターウィズで、重症心身障害といわれる重い障害をもつ人の支援に当たっている。重度の知的障害があるために言語による表現や主張が困難な人たちと言葉を介してコミュニケーションをとることができるのだろうか、と考えながらの仕事である。

就職するまで、障害についての勉強を全くしたことが無い私に答えを教えてくれたのは、利用者のSさんであった。ある日、私がSさんの前をいつものように歩いていると、別に面白いことは何もしていないのに、私の姿を見るなり拍手をし、ゲラゲラと声を上げて笑ったのである。Sさんがどうして笑ったのかは分からなかったが、不思議でもあり、嬉しかった感覚が忘れられない。また、そのSさんと一緒に「笑う」という行為により、嬉しさ、楽しさという感情を共感できたことが、何よりも嬉しかった。私に対する何らかのメッセージや想いを「笑顔と笑い声」という手段で表してくれたことは事実であり、その瞬間、意思疎通が成立したと私には思えた。その時の心が通じ合ったような気持ちは、この仕事に携わってから初めての経験であった。言葉を介さずとも、身振りや手振り、表情などから出される僅かなサインも、確実な意思の主張となると思えた瞬間に出会えたこの瞬間は、振り返ってみると本当にラッキーだった。

今までは、自分の思いを伝える手段は、会話が最も身近で、尚かつ有力であると思っていた私にとって、自分では気付くことができなかったコミュニケーションの在りようを、自分が支援に当たっている方から教えられたことはとても大きな体験であった。コミュニケーションは、お互いの意思を疎通するということだが、大切なことは、「どのような手段で伝えれば、相手に理解してもらいやすいか」、「どのように相手を理解しようとするか」という、そのプロセスにもあると思う。

私を含めた多くの人にとって会話は、自分の意思を伝え、相手の心を掴むために無意識に行っている「あたりまえ」の行為であるが、言語を発することが困難な方にとっては、もちろんそうではない。また、普段、会話以外の方法で、言葉を持たない重度の知的障害のある人の意思をくみ取ろうとしているが、実は、自分が思っている以上に、上手く出来ていないことも多いと思う。

つまり、コミュニケーションは必ずしも言葉にだけ頼っているわけではないことを念頭に置く必要があると思う。だから、「言葉の無いところに寄り添う」気持ちを意識し続けていかなければ、共感できないばかりか、単なる支援者の独りよがりになってしまう恐れがある。支援者が相手の意思や想いにどれほどの「想像力」を働かせながら、その人と向き合っているのかということが何より大切なのではないだろうか。

どれほど重度の障害を持った方からも、自己を主張し、表現するためのサインは必ず発信されていると思う。それは十人十色、手段は異なっても、言語での自己主張が困難な人たちにとっての「言葉」であり、「意思」であるということを信じるとともに、その僅かなサインを見逃さないための、アンテナを張った支援を心がけていきたい。

所員 木藤弘喜（デイセンターウィズ）